慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	石門心學史の研究(石川謙著, 岩波書店發行)
Sub Title	
Author	中井, 信彦(Nakai, Nobuhiko)
Publisher	三田史学会
Publication year	1939
Jtitle	史学 Vol.17, No.3 (1939. 4) ,p.177(517)- 180(520)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19390400-0177

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

健なる態度であつて一般に承認さるべき說であると思はれるが、これも恐らく上代を研究する者にとつては改めて言ふ程の事でなく、著者が「徒なる記事肯定は津田博士前の狀態に後退する」と警戒するまでもなく、著者の書紀に對する態度は最も穩健適切なものとして稱讃を博すると共に、一般史家も多くはかゝる態度を取つてゐることは言ふまでもない事であらう。

著者は改新の原因を記するにあたつて、大化改新以前の社會、政治組織を普通氏族制度とするに反對してゐるのであつて、今まで多くこの爲めに誤解を生じたとなしてゐる。これも一應傾聽すべき說であるが、氏も言つてゐる樣に多くの人々が普通大化以前の時代を氏族制度と呼ぶのは、決してモルガン等の記してゐる樣な嚴格の意味を有するものとは考へてゐないであらう。然し大化以前の社會が氏族制度的諸要素が著しいことはあらゆる方面に於て認められるのであつて、その意味に於てこの時代を氏族制度時代と呼ぶことは妥當の樣に思はれる。而も著者は改新を以て氏族制度を中央集權制度に改革したと言ふことは疑問があると言ふ意味を述べてゐるが、これは如何なるものであらうか。著者が改新の意義を王政復古の國史に顯現したる最初の事象とあると述べてゐる事が一般國史の常識であると共に、氏族制度を中央集權制となしたとすることが最も普通の考へ方である。著者は又改新の性質に關してそれが政治的改革であることを論じ、その社會的改革を輕視するやうに思はれるのも如何かと思はれる。政治的改革は充分なる社會的改革を伴つてこそ意義を有するものであつて、改新の社會的改革の意義を充分認めない事は、その政治的改革を以て舊來の支配系體に支那の制度を與へたに過ぎないとすると同樣な結果に陷るではなからうかと思はれる。

又改新の結果を論ずるにあたつて、普通の國史に於て天武天皇時代を改新反動の時代と見てゐるけれども、著者はこれに反してこの時代を新制發展の時代となし、天武天皇の改新政治發展に御留意になつた事を擧げられてゐるのは、至當の樣に思はれるけれども、それ以前の孝德天皇御半世より齊明天皇時代にかけての御造營、遣唐使派遣、蝦夷征伐等の事件は改新精神に反するものとなし、この時代を改新思想衰退の時代となすのはどうであらうか。これ等の諸事件は改新を行つた人々が國內の改革が一段落をつけたとなし外部にその力を用ふるに至つたと見なすことが出來るけれども、寧ろそれよりも當時の人々が唐に倣はんとしたことがかかる結果になつたと考ふべきで、これ等の事件は當時の人々には改新に反するものではなく、改新を遂行するものと考へられてゐたと見なすべきものゝやうに思はれる。卽ち內外共に改新を完成する爲めにかゝる結果を見るに至つたと爲すのが妥當ではなからうかと思はれるのである。

以上は讀後の二三の印象を記したに過ぎないけれども本書が大化改新研究の最も權威あるものであることには何等の變りがなく、本書に依て改新の研究が一大飛躍を爲した事は史學の研究を爲す者にとつては最も喜ばしい所である。（今宮新）

石門心學史の研究（石川謙著　岩波書店發行）

「心學教化の本質並發達」、「近世社會教育史の研究」等を公にして、心學の研究に沒頭せられてゐた石川氏は、遂に二十餘年の成果を此一卷に傾け、「石門心學史の研究」千五百頁を完成された。この間著者は北海道から四國にかけ一道三府二十七縣に資料探訪を行ひ、尨大な根本資料を蒐集せられてゐる。評者は何より先きに、全くの處女地を獨力開拓された著者の勞力に絕大な敬意を表し、その完成を喜びたい。

本書は分つて、「心學思想並に教化方法の發達」、「心學教化の普及」、「諸藩の教育、教化施設と心學教化」の三編より成る。第一編に於いては、先づ心學といふ名稱とその概念、及び心學の思想系統が取上げられる。そして「心學といふ名稱が石門心學を以て初めとしないことは言ふまでもない。學は畢竟心學であらねばならぬといふ信念と共に、「心學」なる名稱は我が國近世の初頭から擡頭して、それが年と共に擴まりつつあつた事は顯著な事實である」と言ひ、石門の學を心學と呼ぶやうになつたのが何時の頃からか分明しないが、梅巖は全然この語を用ひてゐず、今の所最も古いのは、安永八年三月の手島堵庵の書翰であるとされてゐる。心學の思想的根據については、從來の諸說を詳細に紹介批判し、「陽明學を主張するものにも朱子學を主張するものにも、（評者註、心學には陽明起原說と朱子起原說とが古くから對立してゐる）それぞれ妥當性があると共に、その妥當する範圍に嚴重な限界があつて互に排他的・獨占的であるを得ない」こと、この外に佛教老莊又は神道も重要な要素となり、それらの「一方に片付てしまふことを得ないのであつて、所謂「心學的なもの」は實に其の片付け得ない所にこそ存する」と說かれてゐる。その上、「强ひて言へば、生地の民族的頭腦と國民的心胸とを以て、當年の國民生活と國民文化とを率直に如實に寫象し來つて獨自の體系を形成したものである。如何なる既成の學問の範疇にも拘り泥むことなしに、我より古へをなす國民の學、市人の學を建設したのである」と結論されてゐる。

次に「心學思想の本質」を石田梅巖の思想體系とその後の變遷とに分けて說く。その間、梅巖の心性の說が堵庵の本心、中澤道二の道と次第に倫理的な性質を帶び、やがて寬政異學の禁の影響として、この時流に乘らんとする上河淇水の心學朱子化、これに反對する江戸の大島有隣と紀州の鎌田柳泓の思想を述べ、それらを貫いて流れる心學の倫理運動化の過程を、思想的に跡付けて行くのである。「心學教化の方法」も同じ主題を追ふ。梅巖に於ける修養主義が次第に道話一點張りとなり、遂には渡世のてだてとなり終るのである。

右の如き第一編の內容は、謂はゞ第二編心學教化の普及への伏線なのである。量的に言つても第一編は百八十餘頁、第二編は九百餘頁に上つてゐる。この心學普及史は享保十四年の創始から寶曆十三年に至る創始時代――この時期は未だ社會的な進出が行はれてゐない――に始まり、次いで明和から享和にかけての興隆時代となる。これは天明六年を界として前期後期に分かれる。前期は手島堵庵を中心とする時代であり、後期は京都の手島和庵・上河淇水・江戸の中澤道二の活動期である。この時期が普及史から言へば黃金期であるが、それも永くは續かぬ。江戸心學が道二に

代つて大島有隣に率ゐられると共に、京都の上河淇水と衝突した。これが文化文政の教勢分裂期である。たゞ此の時期に心學者中唯一の思想家鎌田柳泓が出た。かくて天保以後の衰退時代に入るのである。

著者はこの過程を、心學講舍の盛衰と心學者の活動を中心として述べられるのであるが、著者の蒐集に成る多くの根本資料が縱横に使驅され、誠に壓卷である。

第三編の「諸藩の教育・教化施設と心學教化」は著者自身言はれてゐる通り、「從來の心學研究に於いて全く顧みられなかつた方面で、本書で新に手を染めたもの」である。これは武士階級に於ける心學教化の普及と心學教化に對する幕府及び諸藩の態度との二篇から成つてゐる。これらによつて心學が大名初め武家階級に廣く行はれたこと、そしてこの方面での心學は終始修養が主であつたこと、又幕府や諸侯が庶民教化の手段として、保護奬勵利用したものが多いと共に、その流入を禁止した藩もあつたこと、等が明かにせられた。

以上本書の內容を極く大略紹介したのであるが、その間誤謬と思はれる箇所も無いではない。然し區々たる瑕瑕は問ふべきでもなければ、此の書の價値にも何等關係ない。たゞ比較的重要と思はれる一二の感想を述べたい。

その一は、心學なるものが、德川時代の道德史上に持つ全體的な意義、影響が記述されてゐない點である。心學の本領は何と言つても庶民の教化にあるのであるから、始め庶民開明の運動として後には封建道德の一翼として、道德史上に果した役割は大きい。著者が餘りに心學の中に入り切つてしまつた結果であるが、外から大觀する視角にやゝ缺けたものがありはせぬだらうか。

又心學の飢饉救恤運動の如きは、その勃興期から幕末に至るまで、何度も行はれた輝かしき業跡であるのに、僅に嘉永の救恤が幕府の後援で行はれた事實を第三編で記されてゐるに過ぎない。天明年間の京都における救恤事業の如きに就ては一言も觸れて居られぬ。これは單なる遺漏といふよりも、著者の心學そのものに對する觀方に負ふものと思はれる。著者は第三編に特に武家心學を取上げたのみならず、全篇に亙り大名や武家との關係を强調されてゐる。これは心學を國民的運動として視ようとする著者の根本的態度に由來するのであるが、こゝに一つの獨斷とアプリオリのあることは否めない。

更に心學講舍の維持及び聽衆者の謝禮の如き經濟的方面が殆んど見逃されてゐる。心學が席錢入不申を立前とした事は有名であるが、祝儀の名で謝禮を受けたことが梅巖の書翰で知られるし、「前訓」の挿繪等にも畫かれてゐる。又幕末に近く、講舍の維持が困難になると共に、心學者はその財政基礎の確立に努力してゐるのに徵しても講舍の財政は重要な問題に相違ない。教育史的研究を標榜される著者の立場からはやゝ遠いが、一應は取扱はるべきものである。

この外にも指摘さるべき點、問題と思はれる點は少くないが、其等は本書の價値とは自ら別個なものである。此の書は教育史家の著作である。こゝに蒐集整理された貴重な史料を以て、心學の歷史的把握を完成する事は、史家に與へられた課題と言はねばな

ちない。本書の價値はその完成を待つて益々大となるであらう。

尙ほ著者にして本書の綱概を摘記し、石門心學小史ともいふべきものを編著せられたならば、一般人士に大いなる裨益を與へる事が出來ると思ふ。又本書再版の折もあらば、件名索引を今少しく詳細にせられん事を望む。

思はずも妄言を重ねた。著者の寬恕を請ふと共に、改めてその偉大な努力に滿腔の敬意を表する次第である。（菊判本文一三六七頁、挿繪一九九圖、附錄五葉、定價十三圓）（中井信彥）

北畠顯家卿（中村孝也著　全國奉賛會發行）

後醍醐天皇の建武御鴻業は、朝權の回復と肇國の大精神の顯現にありしも、中途禍亂相踵いで挫折し、遂に南狩中崩御せらる。この間、幾多勤王忠臣烈士の父子兄弟相承けて殉節し、其の事蹟は燦然として青史へ一段の光彩を添えてゐる。就中、北畠顯家は弱冠ならずして詔を拜承して皇子義良親王を奉じ東北邊疆の鎭府となり、又質樸剛毅の奥羽健兒を率ゐて二度畿甸に轉戰力鬪し國家經綸の大策を披瀝しつゝ、遂に泉州の野に陣歿す。昨年其の六百年に際會し、顯家と因緣殊に深き福島縣に於ては全國同志の賛同を得て、同年十月二十二日を期し顯家奉祀の縣下伊達郡別格官幣社靈山神社に於て建武鴻業奉賛祭・北畠顯家卿六百年祭・建武忠烈景仰祭を修し、其の記念として奉賛會より中村孝也博士に委囑し本書を上梓せしものである。顯家の傳としては本書を以て嚆矢とし、博士の該博なる知識による論證と流麗なる行文とは、克く顯家の誠忠を萬古に照映して餘す所がない。

本書は顯家を主とするも其間親房、顯信、守親等一家の忠烈の事蹟も諸所に散見し、殊に終の一章を割きて北畠顯信の事蹟を記述し、更に顯家文書等七十餘通を選びて北畠顯家卿文書集と題して附載し讀者に多大の便宜を與へてゐる。就中、延元三年五月十五日戰死に先つこと七日の上奏文は實に時弊を釐革し綱紀を振肅せんとする熱意よりして、敢て直言し乙夜の覽に供し奉りたるもので、顯家の國家經綸を伺ふる史料で、熟讀すべきものである。

最後に著者は、かくの如く傑出せる顯家の人格の構成要素を分解して先天的には遺傳に基く天稟の秀拔と後天的には環境と修養とに由る異常なる鍛錬とを指摘することが出來ると述べてゐる。又顯信の事蹟につきては從來の所傳に、まゝ誤說あれば、他の其の傳の必要を述べられてゐるが、同書も亦博士の筆勞を煩すことを切望する。

余、本書讀了後、二十有餘年前、靈山神社に參拜して神德を景仰し、又、昨春、福島宮城兩縣下に於ける各陸軍病院へ御慰問として御差遣の宮殿下に隨行して滿洲支那兩事變に奮戰、名譽ある戰傷を受けし數千の勇士に面接せしことを共に想起し、これ等勇士には其の昔北畠氏一家に隨ひ殉節せし勇士の熱血の通ふと思へば、自ら感激感謝の念に堪えぬ次第である。（十四、二、五、武田勝藏）

前野蘭化（岩崎克己著　個人出版）